

平成28年

3月の重要農作業

四国中央市農業振興センター

《問い合わせ先》

四国中央農業指導班

(果樹) 東予地方局産業振興課産地育成室

(畜産) 東予家畜保健衛生所

TEL 23-2394

TEL (0898) 68-7322(代)

TEL (0897) 57-9122

【天気予報】

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2013年	10.2	15.6	5.3	69.5
2014年	9.4	13.9	5.2	129.0
2015年	9.0	13.4	4.9	140.5
1981~2010年	9.0	13.1	5.0	91.5

※気温については、1ヶ月の平均値

【作物】

1 麦

(1) 穂肥

施肥時期は、11月中・下旬播種のチクゴイズミで出穂前25~20日(3月中旬頃)、マンネンボシで出穂前30~25日(3月上旬頃)頃が適期です。

施肥量は、葉色と生育量(草丈、莖数)を見て、しあわせ化成を15~20kg/10a施用して下さい。

(2) 排水溝の点検

春先の降雨による根痛みは、収量や品質を大幅に低下させる原因となります。排水溝の点検・作溝を行い、雨水の排水促進に努めて、湿害を防止して下さい。特に、排水溝は必ず圃場の外まで導いて、雨水が圃場外に排水されるようにして下さい。

(3) 赤かび病の防除

赤かび病は開花から約10日間が最も感染しやすく、この時期に温暖(気温15°C以上)で連続降雨があると発生が多くなります。そのため、防除適期は開花期で、この時期の防除は必ず実施して下さい。なお開花期は、通常で出穂期の5~7日後ですが、気温の高低によっては変わりますので、圃場観察して確認して下さい。

また、第1回目の防除後も温暖多雨で経過する場合には、さらにその7~10日後に2回目の防除が必要です。薬剤はトップジンM水和剤1,000~1,500倍を散布します。

なお、トップジンM水和剤は、小麦で出穂期以降2回以内(収穫14日前まで)、裸麦で出穂期以降1回以内(収穫30日前まで)の使用となっています。

2 水稲(雑草の総合防除)

難防除雑草のオモダカ、コウキヤガラ等は単一除草剤の一時期処理では完全に防除することは困難で、耕種的な防除(水稲収穫後の水田の排水による乾田化や冬期耕起、畦畔の除草等)と除草剤の体系処理を組み合わせた総合的な防除を繰り返すことが大切です。

<真鍋>

【野菜】

1 サトイモ

(1) 種芋消毒

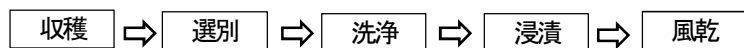
高品質・安定生産のために、種芋消毒を実施して下さい。

ア 薬剤名

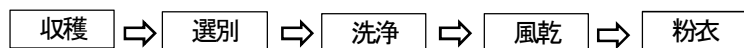
薬剤名	病害名	使用方法及び注意事項
ベンレートT水和剤20	黒斑病	種芋浸漬 20倍 1分間 または、 種芋粉衣 種芋重量の0.4~0.5%

イ 消毒方法

①種芋浸漬



②種芋粉衣



③ポイント

収穫…種芋確保する圃場は、疫病・乾腐病・軟腐病の発病が少ない圃場を選定して下さい。

選別…劣化・腐敗していない種芋(200~250kg/10a)を、子芋と孫芋に選別します。

洗浄…種芋の表面に土が付着していると、消毒液が種芋に付着しないので、洗浄して土を落として下さい。

浸漬…20倍の薬液に、完全に浸漬して1分間処理して下さい。

粉衣…種芋が完全に乾いていると、薬剤の粉が種芋に付着しないため注意して下さい。

④注意点

浸漬・粉衣時には、必ずマスクを着用して下さい。

(2) 植付け準備~植付け作業

ア 畝立ては、畝幅110~115cmで土入れ出来るように台形に畝を立てます。

イ マルチングは、畝に適度な水分がある状態で、黒マルチを被覆します。

ウ 植付けは、株間33~35cm、深さ15cm程度とし、植付ける深さが深すぎると萌芽が遅くなり、浅いと高温障害を受けやすくなります。

(3) 害虫対策

ア コガネムシ類幼虫の被害が多い圃場は、必ず植付け前にダイアジノンSLゾル(50倍、1000/10a)を散布し、速やかに土壌混和します。

イ アブラムシ類対策で、植付け時にアドマイヤー1粒剤(4kg/10a)を植溝に土壌混和します。

2 ヤマノイモ

(1) 種芋準備・消毒

ア 無病で優良な種芋(200~250kg/10a)を準備して下さい。

イ 蔓首を切り除き、1個切片芋が50g程度になるように切断します。

ウ 種子消毒は、青かび病対策のためにベルコートフロアブル(200倍、10分間浸漬)して下さい。

(2) 植付け作業

2条植えは、畝幅110~120cm・株間33~40cmの2条千鳥植え。

1条植えは、畝幅80~90cm・株間30~33cm。

(3) 害虫対策

ア コガネムシ類幼虫の被害が多い圃場は、必ず植付け前にダイアジノンSLゾル(25倍、1000/10a)を散布し、速やかに土壌混和します。

イ タネバエ対策で、植付け時にフォース粒剤を4kg/10aを植溝に土壌混和します。 <越智>

【果樹】

1 温州みかんのせん定

花と芽のバランスが良く、側枝の先端が水平~やや下垂した柔らかい樹姿を目指します。長く強い新梢が出やすくなる強い剪定は控えます。

(1) 着花不足と予想される樹

時期は遅め(花蕾を確認後)にします。果梗枝の除去を中心に軽いせん定とし、着花確保のためにかぶさり枝や養分競合しそうな枝を間引きます。

(2) 着花過多と予想される樹

来年の結果母枝を確保するために、切返しせん定や予備枝の設定で新梢発生を促します。発芽までにせん定を終えられるように開始して下さい。

2 中晩柑類のせん定

樹勢を保ち、樹冠内部まで日が当たるようにします。競合枝の整理や亜主枝上の立ち枝・下垂枝の除去、外に伸びすぎた枝の追い込みなど樹の骨格を整えるとともに、切返し剪定で新梢確保を図ります。また、かいよう病に罹病した枝葉は除去します。

3 春肥

春肥は、新梢の充実、開花結実促進、幼果肥大に不可欠なので、発芽前にしっかりと施します。なお、有機率が高い肥料の場合は、やや早めに施用して下さい。

4 病虫害防除

冬期マシン油乳剤を未散布の園では、発芽前に散布して下さい(冬期に2度散布しない)。かいよう病防除でICボルドーを散布する場合は、マシン油散布14日前までに散布して下さい。

5 品種更新

穂木・苗木は、正規に購入したものか、それから自家増殖したものに限り自家農園で栽培することができます。登録品種の穂木・苗木を知人等に無償譲渡あるいは販売することは種苗法で禁止されています。

<大西>

【花き・花木】

1 シキミの定植と防除

日当たりと排水の良い圃場を選び、pH5.5~6.0の弱酸性土壌にしておきます(苦土石灰60kg/10a)。直径60cm×深さ30cm程度の穴を掘り、根を広げ根の間に土が入るように土をかぶせます。株間120~150cm×条間150cm(1.5本/坪)程度を目安に定植して下さい。

冬期にマシン油乳剤を散布していない圃場は、芽が動き出す前までに100倍で散布して下さい。3月下旬にダイリーグ粒剤を12kg/10a散布し、アブラムシの防除をして下さい。また、生育が悪い圃場では、MB粒状固形を20kg/10a施肥し樹勢を回復させて下さい。

2 アネモネ・ラナンキュラスの摘花

球根肥大のため、花はすべて刈り取り、圃場の外に出します。

<日野>

【畜産】ハエの防除対策

ハエが活動し始める時期となります。近隣の民家等に迷惑をかけることのないよう早めの対策に心がけてください。なお、ハエの防除は鶏舎の種類により異なりますので、以下の点に留意しながら対策を行ってください。

1 開放低床鶏舎の場合

ハエの発生源は床糞の場合が多く、開放低床鶏舎でのハエ対策の重要なポイントは除糞の間隔です。ハエは一般に新鮮な糞に産卵するので、すみやかに除糞を行い高温や乾燥状態にし、ハエの産卵や発育を抑えることが効果的です。また、発育抑制剤を使用する場合は、あまり短期間で除糞してしまうとコスト面で高くなるので、ハエの発生状況と薬剤費を考慮し除糞の期間をきめる必要があります。

2 開放高床鶏舎の場合

高床式鶏舎ではヒメイエバエの発生が多くなります。ヒメイエバエは気温が12~14度では成虫になるまでに50~55日かかる(イエバエは20日程度)ことから、ハエ幼虫発育抑制剤を発生源に散布する場合は早い時期から丁寧かつ定期的に行う必要があります。また、成虫が多くなる前に鶏舎内の鶏糞を完全に除去することが大切です。

<中谷>